

第七章 結論

7-1 各章のまとめ

ここで、第一章から第六章までの内容と結果をまとめる。

第一章では、本研究の背景と目的・意義について述べた。

第二章では、本研究で実施した実験と調査の概要を述べた。実験の概要として、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の説明、実験対象地域や実験対象者についての説明を述べた。また、調査の概要として、調査対象者や街路景観イメージ調査と景観認識調査からなるアンケート調査についての説明を述べた。

第三章では、本研究で行った分析方法について述べた。単純集計による分析やプロフィール分析による分析、因子分析による分析、類型化による分析についての説明を述べた。

第四章では、本研究で実施した景観認識に関するアンケート調査と実験への参画度に関するアンケート調査の単純集計及びクロス集計の結果を示した。また、調査の実施状況やサンプリングについての説明を述べた。

以下に、第四章で得た結果を述べる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、サンプルは暖かく、活気のあるイメージの色を、街並みをイメージする色として選びやすくなる傾向にあることが示された。また、街並みの古さをイメージする色や、対象地域との関わりの薄い色を選びにくくなる傾向にあることが示された。さらには、実験の感想として「静かで色味の無い町が、赤く色づけて頂いて浮きたっているよう」や「町が明るく感じました」という声が聞かれた。つまり、実験をおこなうことによって街並みの古さのイメージが薄くなり、実験前は意識していなかった街並みの活気を感じた、もしくは活気を願うようになると考えられる。
- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、「電柱・街路灯に関する記述」が減少する傾向にあることが示された。「電柱・街路灯に関する記述」は「歩にくさ」や「車の通りにくさ」といった街並みの利便性を理由として想起されているものがほとんどであった。また、電柱・街路灯への関心以外は実験の前後で大きな変化をしないことが示された。実験を行っても、歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心は変化しないと考えられる。つまり、実験を行うことによって変化するのは街並みの利便性への関心であり、街並みの利便性に対する不満が減少すると考えられる。また、実験は歴史的な価値のある景観要素の保護や街並みの景観の向上に対する関心へは影響しないと考えられる。

- 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の前後において、参画者と不参画者の街並みへの関心の傾向に差が見られなかったことから、実験への参画の有無は街並みへの関心に大きな影響を与えないと考えられる。

第五章では、本研究で実施した街路景観イメージに関するアンケート調査の単純集計結果を示した。また、単純集計の結果と第四章で得られた結果を用いて、プロフィールの分析や因子分析による分析結果を示した。

以下に、第五章で得た結果を述べる。

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、実験を行うことにより、街並みのイメージが活気あるイメージになることが示された。また、実験の感想として「華やかで活気のある街並みに見えました」や「いつもの高宮とちがって魅力を感じました」といった声が聞かれた。赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行い、飾り付けられた街並みを見たことで、実験前は認識していなかった街並みの新たな一面を感じたために街並みの「活気」のイメージが向上したと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は街並みの「活気」のイメージを向上させる効果があると考えられる。

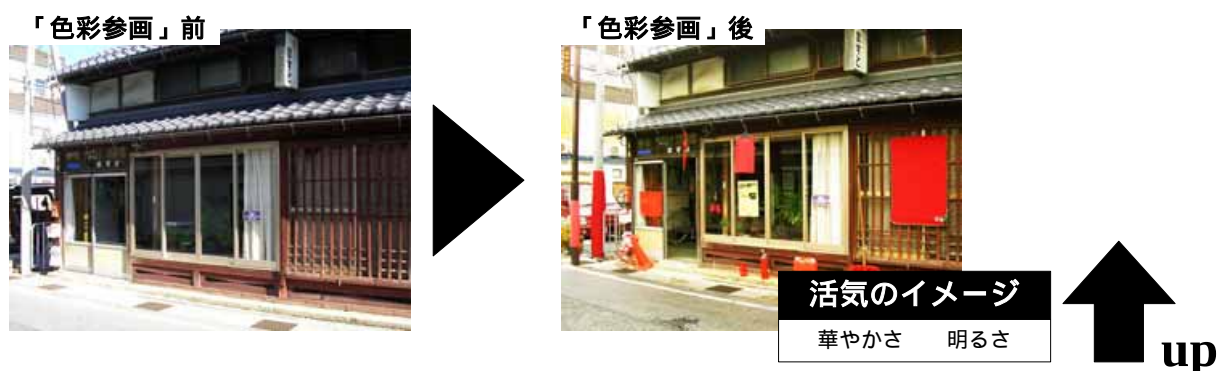
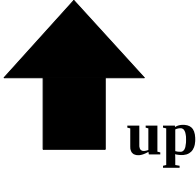


図 7-1 「色彩参画」前後のイメージの変動

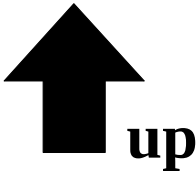
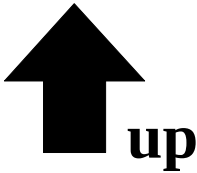
- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、参画者の方が、街並みに活気あるイメージを感じる傾向が強いことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、街並みの「活気」のイメージは大きく向上すると考えられる。また、因子分析の結果では参画者の方が、整ったイメージ、喧噪のイメージも強くなることが示されている。これは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、自ら積極的に景観に参画し、街並みの景観を整え、街並みのにぎやかさを感じたためであると考えられる。

表 7-1 「色彩参画」前後の参画者と不参画者のイメージの変動

	参画者の変動		不参画者の変動
街並みの 活気のイメージ		>	

- プロフィール分析による分析結果と因子分析による分析結果の両方の結果で、高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がないことが示された。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無は、街並みの景観イメージの変化に影響を与えるが、参画の度合いは街並みの景観イメージの変化に大きな影響は与えないことがわかった。以上より、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく、参画の有無であると考えられる。

表 7-2 「色彩参画」前後の高参画者と低参画者のイメージの変動

	高参画者の変動		低参画者の変動
街並みの 活気のイメージ		=	

第六章では、第四章と第五章で得た結果を用いて行った類型化の結果を示した。また、ここで得た類型と第四章の結果を用いて行った、クロス集計による分析結果を示した。以下に、第六章で得た結果を述べる。

- 景観イメージ構造タイプとサンプルの属性、景観認識とのクロス集計を行った結果、サンプルの属性、サンプルの抱く街並みをイメージする色、街並みへの関心タイプの全てにおいて、景観イメージ構造との関係性を見出すことは出来なかった。つまり、サンプルの属性、景観認識に、街並みの景観イメージの変化への影響力は無いと考えられる。

- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とのクロス集計を行った結果、実験を行う前後の参画者の景観イメージ構造に違いがあることがわかった。つまり、実験へ参画した場合、街並みの景観イメージ構造は変化すると考えられる。実験を行うことによって「伝統不満型」の景観イメージ構造タイプが減少し、「活気認知型」の景観イメージ構造タイプが増加したことを考えると、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって参画者は街並みの古さに対する不満が減り、活気を感じるようになると考えられる。
- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無とのクロス集計を行った結果、実験を行う前後の不参画者の景観イメージ構造の違いを明らかにすることは出来なかった。つまり、実験へ参画しなかった場合、街並みの景観イメージ構造は大きく変化しないと考えられる。
- 景観イメージ構造タイプと赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画タイプとのクロス集計を行った結果、参画タイプと景観イメージ構造の関係性を見出すことが出来なかった。つまり、実験への参画の度合いに街並みの景観イメージの変化への影響力は無いと考えられる。

表 7-3 景観認識及び実験への参画と景観イメージ構造の関係

	属性			景観認識		実験への参画	
	性別	年代	職業	イメージする色	街並みへの関心	参画の有無	参画の度合い
景観イメージ構造	×	×	×	×	×	○	×

○：関係有り ×：関係無し

- 景観認識、実験への参画と景観イメージ構造の関係について分析を行った結果より、最も景観イメージ構造の変化との関係性が高い事柄は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験への参画の有無であり、参画の度合いではないと考えられる。つまり、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験へ参画することが最も重要な事柄であり、赤く飾り付けられた街並みを目にするだけでは、景観イメージ構造の大きな変化は期待できないと考えられる。

7-2 「色彩参画」の効果及び役割

7-2-1 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観認識の関係

(1)赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と街並みをイメージする色の関係

街並みをイメージする色は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことにより灰や茶、青といった色を選びにくくなり、赤や橙を選びやすくなる。また、不参画者と比較すると参画者の方が赤や橙を選びやすくなる。

灰や茶といった色は街並みの地味さや古さといったマイナスイメージによって想起されていることが多い。青は実験の対象地域である高宮町とは関わりの薄い琵琶湖や河川によって想起されていることが多い。赤や橙は活気ある街並みや街並みの暖かさといったプラスイメージによって想起されていることが多い。

これは、実験を行うことによって地域住民は日常的に目にする街並みの景観に対して暖かさや活気を感じるようになるためであると言える。また、不参画者に比べて参画者の方が赤や橙を選びやすくなっていることを考えると、参画者の方が日常的に目にする街並みの景観に対して暖かさや活気を感じるようになると言える。ただ、実験後に赤が多く選ばれていることは、単に「色彩参画」を行う色として赤を選択したため、実験当日に街並みで多くの赤を目にしたことが原因であるとも考えられる。

(2)赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と街並みへの関心の関係

街並みへの関心は、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、街並みの中の電柱・街路灯への関心が減少する傾向にある。電柱・街路灯に対して関心を持つ理由のほとんどが街並みの利便性に関する理由であることを考えると、実験を行うことにより利便性に対する欲求が減少したと言える。つまり、実験を行うことによって、街並みの利便性を第一に考えることで街並みの景観の価値を軽視するのではなく、街並みの景観の重要性を認識するようになったと言える。これは、今まで気づいていなかった街並みの新たな一面を発見し、現状の街並みの景観の価値を再認識することが出来たためであると考えられる。

統計的に見ると、参画者と不参画者の街並みへの関心の傾向に大きな差が見られなかった。つまり、実験への参画の有無は街並みへの関心に影響を大きな影響を与えないと言える。本研究で行った、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験は、市民によって街並みの景観を形成することを目的としており、街並みの景観の是非を問うものではない。そのため、本研究で行った、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験では、市民が街並みの不満点や保護したい点を見直すまでは到らなかったと考えられる。

7-2-2 景観認識と景観イメージの関係

街並みをイメージする色と景観イメージ構造との間に明確な関係性がないことが示された。また、街並みへの関心と景観イメージ構造との間に明確な関係がないことが示された。つまり、本研究において調査を行った、街並みをイメージする色と街並みへの関心による景観認識は街並みの景観イメージの変化に影響を与えないと言える。

7-2-3 赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験と景観イメージの関係

(1)実験への参画の有無と景観イメージの関係

まず、参画者の景観イメージ構造について考察を行う。赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことにより、参画者の景観イメージは変化することが示された。

実験を行うことにより、参画者は活気ある街並みのイメージ、整ったイメージ、騒がしいイメージが強くなると言える。また、実験を行うことによって「不満型」の景観イメージ構造タイプが減少し、「活気認識型」の景観イメージ構造タイプが増加する。つまり、実験を行うことによって参画者は街並みに対する不満が減り、活気を感じるようになると言える。

これは、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験に参画することによって、自ら積極的に景観に参画し、実験前は認識していなかった街並みの新たな一面を感じたためであると考えられる。

次に、不参画者の景観イメージ構造について考察を行う。不参画者の景観イメージ構造においても参画者と同様に、実験を行うことにより、活気ある街並みのイメージ強くなるように見える。しかし、統計的には実験を行う前後の不参画者の景観イメージ構造に明確な違いがないことが示された。つまり、実験へ参画しなかった場合、街並みの景観イメージは大きく変化しないと言える。

(2)実験への参画の度合いと景観イメージの関係

赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行う前後の高参画者と低参画者の間の景観イメージの変化に大きな差がなく、参画タイプと景観イメージ構造の関係性を見出すことが出来なかった。実験への参画の度合いは街並みの景観イメージ構造の変化に影響を与えないと考えられる。

つまり、「色彩参画」による景観形成へ参画すれば、参画の度合いに関わらず景観イメージは変化すると言える。

7-2-4 「色彩参画」の効果

赤を用いた「色彩参画」により、市民が景観に参画することによって、街並みへの不満が減り、活気ある街並みのイメージが強くなることが示された。このイメージの変動は「色彩参画」に用いた色が赤であることが原因であるとも考えられる。しかし、街並みをイメージする色の集計結果と景観イメージ構造タイプを用いてクロス集計を行った結果、両者の間に明確な関係が無いことが示された。街並みの景観イメージと街並みをイメージする色に明確な関係は無く、赤という色そのもののイメージの影響は小さいと言える。つまり、街並みへの不満が減り、活気ある街並みのイメージが強くなった直接の原因は「色彩参画」によって市民が街並みの景観を作り上げたためであると考えられる。そのため、市民による「色彩参画」は、街並みを捉えなおすことに役立ち、活気ある街並みのイメージを強くする効果があると考えられる。

調査対象者の景観認識は景観イメージとは無関係であることがわかった。また、「色彩参画」の度合いも景観イメージとは無関係であることがわかった。景観イメージとの関係性が見られた要素は、「色彩参画」による景観への参画の有無のみであった。このことより、「色彩参画」を行う際に重要となる事柄は、参画の度合いではなく参画の有無であると言える。

以上より、「色彩参画」による景観形成は、市民が「色彩参画」によって景観に参画するという行為自体に意味がある。赤く飾り付けられた街並みを目にするだけでは「色彩参画」の効果は期待できない。静的な行為としての景観との関わりではなく、「色彩参画」によって、動的に景観に関わるという体験が最も重要な事柄である。

つまり、人は街並みの景観を視覚のみで捉えがちであるが、視覚以外の身体的感覚を用いて積極的に景観に関わることで、街並みの景観イメージが変化し、景観の捉え方が変わると考えられる。

同時に、「色彩参画」の効果は街並みへの関心までは至らないことから、街並みのイメージ形成には寄与するものの、まちづくり等への関心までは直接には影響しないという限界を持つ。

7-2-5 「色彩参画」の位置付け

通常、人は景観を視覚のみによって捉えがちである。しかし、本研究によって、景観を捉える際に視覚以外の感覚を用いて動的に景観に関わることの重要性を明らかにすることが出来た。景観を視覚で捉えると同時に、視覚以外の身体的感覚で捉えることの重要性については、中村が仮想行動の考え方に基づいて述べている。

中村は、景観を捉えるためには、視覚によって「対象との距離感を創り出してモノを外側から把握しそれを形」¹⁾として客観視する「静観の美学」ではなく、身体的感覚によって対象の「手どりや温もりを通じて世界を内側から」²⁾捉える「参加の美学」が重要であると述べている。

仮想行動の考え方については、中村が山水画の鑑賞方法の一つである「臥遊」を例に挙げ、「『臥遊』とは、観る者が画中の人物にのり移って、山水の趙遙を楽しむことをいう。空間の知覚は、多少とも、このような仮想の行動に人を誘いこむ性質をもっている。」³⁾と述べている。また、中村は景観を見るとき「私たちの視線はたしかに触覚性を帯びている」⁴⁾と述べている。つまり、中村の唱える、景観を捉える際に用いる身体的感覚とは、触るように景観を眺めることであり、視覚を用いて仮想的に街並みの景観に触れることであると言える。

ここで、「色彩参画」という体験によって、街並みの景観に“触れる”(視覚以外の感覚によって街並みの景観を捉える)ことを「街並みに触れる」、視覚によって街並みの景観を捉えることを「街並みを見る」と言い換えることが出来よう。

表 7-4 仮想行動の考え方における「街並みに触れる」の位置付け

	視覚による把握	視覚以外による把握
仮想行動(中村)	「静観の美学」	「参加の美学」
本研究における考察	「街並みを見る」	「街並みに触れる」

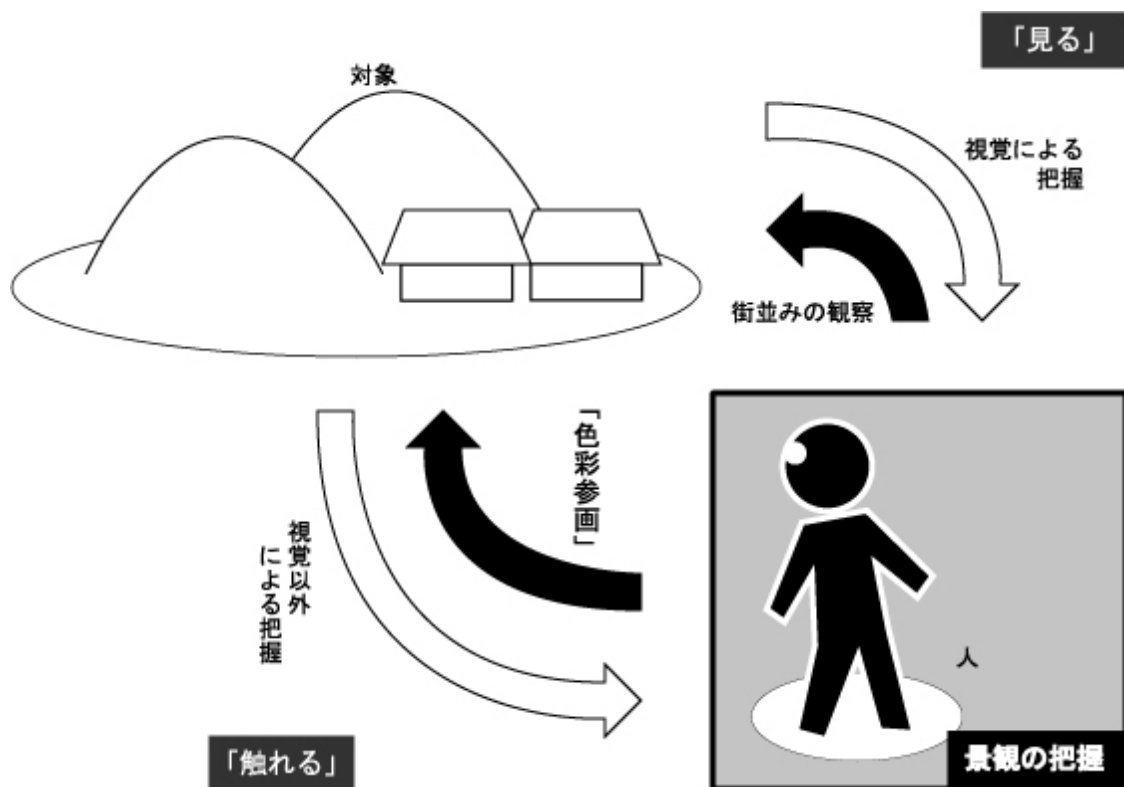


図 7-2 景観の把握における「色彩参画」の役割

「街並みに触れる」を明確にするために、景観形成における手法としての「色彩参画」の特徴を整理する。

「色彩参画」には大きく 2 つの特徴がある。 実際に景観の形成を行うことで視覚以外の身体的感覚を用いて積極的に景観に関わる手法である。 全体の統一性と個の多様性を同時に持つ手法である。

については「7-2-4 『色彩参画』の効果」で説明を行った。「全体の統一性と個の多様性を同時に持つ」についての説明を行う。

「色彩参画」は、決められた色(本研究では「赤」)を飾る。そのため、飾り付けられる色は一色のみであり、街並みに全体の統一性が生まれる。この全体の統一性によって、街並み全体としての景観を見ることが出来る。また、「色彩参画」は、決められた色のものでは何を飾ってもよい。そのために、参画者ごとに様々なものを飾りつける。このように、参画者ごとに景観への参画の仕方が異なることで、街並みに個の多様性が生まれる。この個の多様性によって、街並み全体の景観を構成する、景観構成要素の存在が浮かび上がる。これは、「色彩参画」が景観への参画に色を用いるためである。このように、「色彩参画」を行うことにより、街並みの景観における全体の統一性と個々の多様性を同時に捉えることが出来ると考えられる。

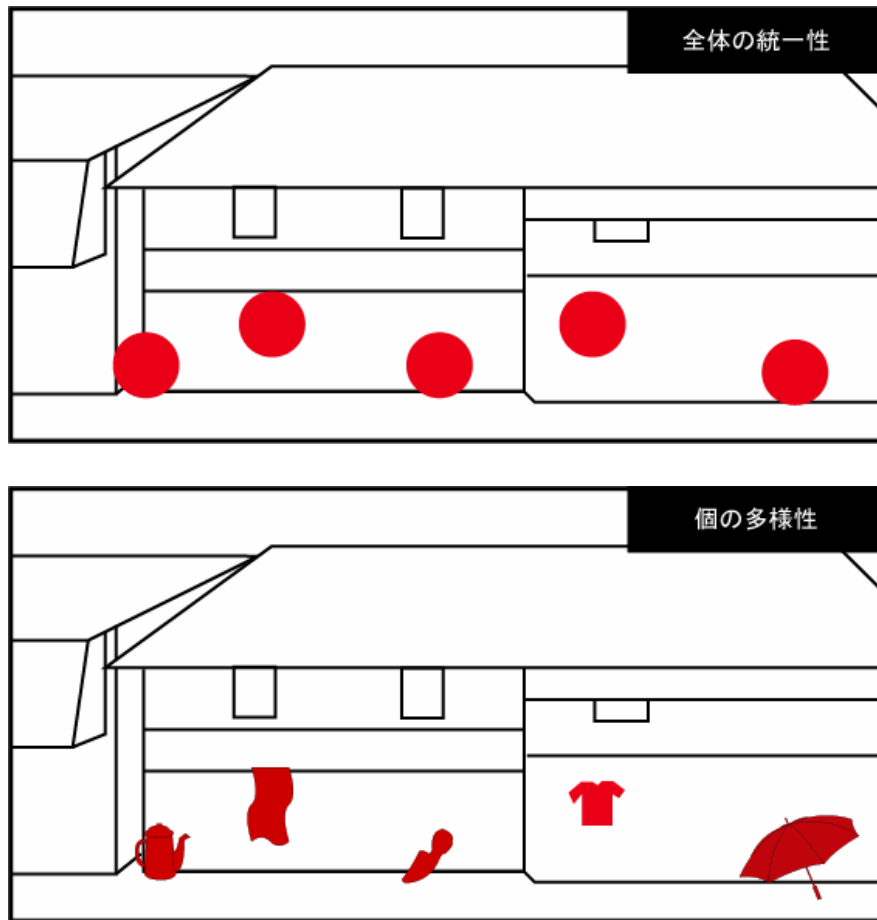


図 7-3 「色彩参画」による全体の統一性と個の特異性の把握

つまり、「街並みに触れる」とは「色彩参画」という体験により、色を用いて実際に景観に参画することである。

以上より、「色彩参画」についてまとめる。

- 「色彩参画」を行うことによって、街並みの景観における全体の統一性と個の特異性を同時に捉えることが出来る。
- 「色彩参画」を行うことによって、「街並みを見る」と同時に「街並みに触れる」ことが体験でき、複合的に景観を捉えることが出来る。

本研究によって、街並みの景観を複合的に捉えるための手法としての「色彩参画」の可能性を示すことが出来た。今後、市民が景観計画や景観協定等の策定といった、日常の景観をつくる際に、市民が参画するための“入り口”として「色彩参画」が用いられることが望まれる。

7-3 本研究の課題と今後の展望

7-3-1 本研究の課題

本研究の課題を調査方法、実験方法、分析方法の3点から述べる。

(1)調査方法の課題

調査対象の選定における最も大きな課題は、調査有効サンプルの少なさである。本研究では、赤を用いた「色彩参画」による景観形成実験の景観イメージへの影響を明らかにするために、アンケート調査を行った。そのため、実験前後のアンケート調査票の両方に回答したサンプルのみが調査有効サンプルとなる。特に不参画者では、事前のみ、もしくは事後のみにしか回答していないサンプルが多く見られたために、調査有効サンプルが少なくなってしまった。調査対象の選定や、アンケート調査の実施の仕方に工夫が必要であったと言える。結果の信頼性を向上させるためにも、より多くのサンプルを調査することが望ましい。しかし、分析の段階ではt検定やカイ二乗検定を行うことで差の検定を行っており、信頼性を得るために十分であると考えられる数値を得られたために、調査有効サンプルの少なさについては問題無いと考える。

景観イメージに関するアンケート項目の課題は、SD法を用いた項目のわかりにくさが挙げられる。幾人かのサンプルに記入漏れが見受けられた。SD法は全ての形容詞対への回答を前提として分析を進めていたために、1つでも記入漏れがある場合はそのアンケート調査票は無効となる。全ての形容詞対への回答を徹底させる必要があったといえる。調査対象者は高年世代(60歳以上)が高かったことを考えると、よりわかりやすいアンケート項目となるように工夫が必要であったと言える。

街並みへの関心に関するアンケート項目の課題は、無回答者の割合が高かったことである。これは、同様の調査を実験の前後で二度行ったために、自由記述形式の項目は回答が面倒であったためであると考えられる。事前調査を行い街並みへの関心の傾向を事前に調査することで、アンケート作成時に自由記述形式ではなく選択回答形式とするなどの工夫が必要であったと考えられる。

実験への参加度に関するアンケート項目の課題は、記述スペースの少なさである。筆者が予想していたよりも数多くの種類が、実験当日に街並みに飾り付けられたために、積極的に参加した住民は記述スペースが足りず、枠外にまで回答されているものが見受けられた。アンケート作成時に回答スペースの確保などの工夫が必要であったと考えられる。

(2)実験方法の課題

実験方法の課題は、「色彩参画」によって街並みに飾りつけるものを指定しなかったことである。様々なものが飾り付けられた結果、「『何でも良い』ということで街並みの統一感が欠けていた」という反応を示した参画者が存在した。しかし、街並みに飾り付けるものを考えることも、「色彩参画」によって景観へ参画する一つの工程であると考えられる。飾り付けるものを指定しなかったために、全ての参画者が飾りつけるものを考える工程を体験したと言えよう。そのため、「色彩参画」による景観形成実験後の参画者と不参画者の間に明確な景観イメージの差が生まれたと考えられる。

「色彩参画」に用いる色については、色の選定を筆者のみで行ったことである。今回の実験では、飾り付ける色を「赤」と定めた。これは、彦根市の歴史的な色が赤であるためである。しかし、一部の参画者から「次はブルーでやったら」や「赤は不気味」といった反応を示した市民が存在した。「色彩参画」に用いる色の選定に市民の意見も取り入れることで、より積極的に市民が「色彩参画」を行うことが出来たとも考えられる。

(3)分析方法の課題

本研究では、単純集計による分析と因子分析による分析、クラスター分析による類型化の大きく1つの方法によって分析を行った。特に因子分析による分析の課題を述べる。

因子分析による分析については、「(1)調査方法の課題」でも述べたように調査有効サンプルの少なさが挙げられる。統計的な手法を用いて分析を行うためにはサンプル数が少ない。しかし、因子の固有値・累積寄与率は結果の信頼性を得るために十分であると考えられる数値を得られたために、調査有効サンプルの少なさについては問題無いと考える。

サンプルの類型化については、定量的な評価のみを用いて類型化を行ったことが課題である。特に街並みへの関心タイプの分類においては、より定性的な評価を加えることも検討すべきであったと考えられる。

クロス集計による分析については、ほぼ全ての集計結果について統計的に有意な値が得られず、結果を生かすことが出来なかった。そのため、景観イメージ構造へ影響を与える要素として明らかに出来たのは「色彩参画」による景観形成への参画の有無のみであった。多くのサンプル数を確保すれば、より微細な統計的有意差を把握することが出来る。その意味では、本研究で有意差が無いとした要素についても、より多くのサンプル数を確保した上で分析を行えば、有意差が得られる可能性が残される。より多くのサンプルの確保や調査項目の工夫を行い、「色彩参画」による景観形成への参画の有無以外の要素と景観イメージ構造の関係を調査していく必要があったと考えられる。

7-3-2 今後の展望

本節では、「色彩参画」に関する研究における今後の展望と景観形成における手法としての「色彩参画」の可能性について述べる。

以下に、「色彩参画」に関する研究における今後の展望を述べる。

本研究では対象地域として選定した地域は旧中山道沿いの地域であり、古い街並みを残す一地域のみを対象としている。そのため、都市部などの近代的な地域での「色彩参画」の効果については言及していない。近代的な地域では、本研究で得た「色彩参画」が景観イメージへ与える影響とは違う影響が現れる可能性が考えられる。今後は近代的な地域における「色彩参画」の効果を明らかにすることが望まれる。

本研究では「色彩参画」の一時的な効果については明らかにしたものの、継続的な効果については言及していない。そのため、今後は「色彩参画」による景観形成を毎年行う等、継続することによって得られる効果を明らかにすることが望まれる。

本研究で行った「色彩参画」による景観形成実験は、「色彩参画」に用いる色を赤と選定した。そのため、調査結果には赤を用いたことによる効果も含まれている可能性が考えられる。今後は赤以外の色を用いた「色彩参画」による景観形成実験を行うことによって、より明確に「色彩参画」の効果を明らかにすることが望まれる。

以下に、景観形成における手法としての「色彩参画」の可能性を述べる。

本研究によって、「色彩参画」は街並みの新たな街並みの景観を捉えなおすことに役立ち、活気ある街並みのイメージを強くする効果があることが示された。今後、市民の景観形成への積極的な参画を促すために、市民が街並みの景観を考え、見直すための一つの手法として、「色彩参画」が用いられることが望まれる。

「色彩参画」による景観形成実験への参画者は、「色彩参画」を楽しんで行っている様子が見て取れた。事実、「色彩参画」の感想として、「(『色彩参画』を)毎年つづけるとよい」や「街の家だけで参加して楽しい事でした。」といった意見が見られた。つまり、「色彩参画」は楽しみながら、景観に“触れる”ことが出来る手法と言える。今後、日常の景観づくりに、市民が楽しみながら参画するための手法として「色彩参画」が用いられることが望まれる。

脚注及び参考文献

- ¹⁾中村良夫：風景学・実践編，p.21，中央公論新社(2001)
- ²⁾中村良夫：前掲書，p.21，中央公論新社(2001)
- ³⁾中村良夫：風景学入門，p.95，中央公論社(1994)
- ⁴⁾中村良夫：前掲書，p.17，中央公論新社(2001)